ランチョンセミナー7

演題名	認知症でみられる理解できない症状・不可解な行動はなぜ生じるのか？ ～認知心理学，神経心理学から認知症症状を考える～

概要

認知症診療・介護を進める上で患者さんが示す行動障害・精神症状(周辺症状)に困惑することが少なくない．徘徊や暴力行為，物盗られ妄想，異食などのように目立った周辺症状ばかりでなく，同じ話を何回もする，事実でない話(作話)が多い，無目的な行動を何時間でも繰り返す，スーパーに行って必要なものを買ってくることができないなど日常生活のなかで理解できない症状あるいは不可解な行動に戸惑うことが少なくない．たとえば，事実と異なる話をするのはなぜか？ 認知心理学でいう source monitoring(情報源識別)と reality monitoring(現実性識別)を援用すると発現機序を説明することが可能になる．前者は，ある情報をどのような情報源から得たのか，あるいはどのような状況下で得たのかに関する記憶・判断力を意味する．後者は， 想起内容が外的で知覚された情報源・出来事(事実)なのか内的な情報源(想像しただけ，非事実)なのかを判別する能力である．認知症では，写真やテレビでしかみたことがない出来事，あるいは伝聞で聞いたことを現実に自分で体験したことと混同しやすい(source monitoring の低下あるいは障害)．もし reality monitoring が正常に働いているならば，そのことが事実なのか事実でないかの判断を下すことができるはずである．認知症でこの reality monitoring も低下・障害を受けると，事実と事実でないことの判別ができなくなり，事実でない事柄をさも事実のように話す，すなわち作話といわれる状態を呈することになる．何時間も掃除をしている，編み物を始めると終日している，デイサービス施設で大勢の人がいると落ち着かず大声を出すなどの行動障害も注意機能の視点から説明することができるかもしれない．本講演では，認知症患者さんにみられる理解できない困った症状あるいは不可解な行動障害について認知心理学ならびに神経心理学の視点からその発症メカニズムを考えていきたい．